

会議名	日本獣医師会・日本獣医学会連携大会
開催日時	平成 18 年 3 月 18～21 日
開催場所	つくば国際会議場「エポカルつくば」(つくば市)
主催者	(社)日本獣医師会 (社)日本獣医学会
参加人数(概数)	約 3,500 名 (主として大学、研究機関の研究者及び開業獣医師)
1. 会議の概要 (500～1,000 字程度または議事内容の資料添付)	<p>日本獣医師会・日本獣医学会連携大会は秋篠宮文仁親王殿下をお迎えして開催された。秋篠宮文仁親王殿下は「家畜化の考え方 - 鶏の事例から - 」と題して記念講演を行った。</p> <p>1. 合同シンポジウム : 平成 17 年度日本獣医師会三学会(日本産業動物獣医学会、日本小動物獣医学会、日本獣医公衆衛生学会)と第 141 回日本獣医学会の合同シンポジウムは、「乳房炎の新知見(6 課題)」、「悪性腫瘍の細胞増殖・浸潤・転移(4 課題)」、「小動物の栄養管理(1 課題)」、「自治体における人と動物の共通感染症対策(3 課題)」、「安楽死を考える(4 課題)」、「止血凝固異常症(4 課題)」、「家畜における栄養と繁殖機能についての最前線(5 課題)」、「角膜疾患の臨床(4 課題)」、「創傷治癒(4 課題)」、「生態系を守る保全医学(3 課題)」、「家畜と野生動物における人と動物の共通感染症(6 課題)」、「犬の遺伝性疾患(2 課題)」の 12 テーマについて行われた。</p> <p>2. 日本産業動物獣医学会 : シンポジウムは、「ヨーネ病の防除(5 課題)」、「牛の蹄病防除対策(5 課題)」、「BSE の現状と課題(3 課題)」の 3 テーマ、教育講演「牛の第四胃変位の発生要因(1 課題)」のほか、47 課題の研究発表が行われた。なお、特別企画「獣医療と動物看護師(士)」のテーマで、教育講演「看護教育(1 課題)」、「動物病院における感染症対策(2 課題)」、シンポジウム「動物看護師(士)の現状と今後の職域について(5 課題)」が行われた。</p> <p>3. 日本小動物獣医学会 : 教育講演 「臨床徴候からの診断・治療のアプローチ(5 課題)」、「耳道疾患(4 課題)」のほか、43 課題の研究発表が行われた。</p> <p>4. 日本獣医公衆衛生学会 : 市民公開講座「人と輸入動物の共通感染症(4 課題)」、教育講演「動物の愛護及び管理に関する法律の改正について(3 課題)」のほか、25 課題の研究発表が行われた。</p> <p>5. 日本獣医学会 : 市民公開講座「ヒトと自然との共生(2 課題)」、シンポジウムとして 「イヌとネコの神経腫瘍の病理(2 課題)」、「感染防御免疫に関する最新知見(5 課題)」、創薬(医薬品開発)の最前線(5 課題)、「肝胆疾患の治療の現状と未来(4 課題)」、「グローバル時代の馬の感染症対策(5 課題)」、「異物認識の多様性と微生物感染(5 課題)」、「最近話題の鶏病対策(5 課題)」、「食の安全・安心(6 課題)」、「FIV も研究動向と臨床応用の可能性(4 課題)」、「アジアの獣医解剖教育の現状と将来展望(8 課題)」、「獣医教育におけるプラチネーションモデルおよびマルチメディア・プログラムの開発・応用とその効果(5 課題)」、「産業動物の寄生虫病(4 課題)」、「本能行動と脳内ペプチド(4 課題)」、「基礎獣医学から腎臓を考えてみよう(7 課題)」の 14 テーマについて行われたほか、ワークショップ、セミナーなどで 29 課題が発表された。さらに、研究は 270 課題につて発表され(ポスター発表を含む)、活発な質疑応答が行われた。</p>

<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名</p>	<p>1. 鳥インフルエンザは世界各地で発生しており、その蔓延防止が緊急課題となっている。迫田・喜田(北大獣医)は「鳥インフルエンザのワクチン開発」について発表した。H5N2 型と H7N1 型のウイルスの遺伝子を一部ずつ使って、毒性と感染性のない H5N1 型の改造ウイルス株を作成した。この改造したウイルス株による新ワクチンは、1 回接種で 2 週間後には防御免疫が成立する。</p> <p>2. 生産現場では牛乳房炎の予防対策は重要な課題である。長谷川(畜草研)は、「搾乳技術とミルクカーによる乳房炎防止方法の試み」と題して発表した。搾乳作業における乳頭のディッピングやシール剤の開発、ミルクカーの分房別拍動比制御や逆流防止クリップの改良により予防効果を実証した。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの(課題ごとに概要を 400 字程度)</p>	<p>1. 乳牛の繁殖成績は過去 10 年間で大きく低下している。草刈(根釧農試)は、「乳牛の繁殖機能を左右する栄養的要因」について発表し、分娩後に給与する濃厚飼料の CP 含量が少ないほど初回排卵が遅延する。また、高泌乳牛では産褥期の乾物摂取量(DMI)が 19kg 以上、CP 充足率が 90%以上、TDN 充足率が 80% 以上であれば、分娩後の繁殖機能の回復は早期に回復する早いことを実証した。</p> <p>2. 新生子牛は、初乳摂取による免疫獲得が感染防御に重要な役割をはたす一方で、汚染母乳を介して感染症にかかることがある。中岡ら(石狩家畜保健衛生所他)は、「初乳の加温処理による病原体の不活化と子牛への給与試験並びに加温処理器の検討」の発表を行い、病原体の不活化には 60 30 分が最適であり、初乳の物理的性状、成分、嗜好性に影響しない。また、農場で利用可能な加温処理器の開発により、ヨーネ病、サルモネラ症、リステリア症などの感染症の発生防止に有効であることを実証した。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>1. 迫田・喜田(北大獣医)が開発した鳥インフルエンザの遺伝子組換えワクチンは、本病の防疫に明るい材料を提供するものである。今後、政府が流行に備えて輸入し、備蓄を進める代替ワクチンとした開発が進められることとなる。その有効性、安全性などに関する開発課題の応募があると予想されるが、その利用に結びつくまでには多くの基礎的知見が必要と思われる。</p> <p>2. 中岡ら(石狩家畜保健衛生所他)が開発した加温処理器は、一部で実用化されているが、製品の改良・低コスト化が要請されている。</p>
<p>5. 報告者</p>	<p>柏崎 守</p>